

## 序章

## 「めぐみ」を通じて森と関わる

東京大学大学院新領域創成科学研究科特任助教 田中 俊徳

国土の約70%を森林に覆われる日本では、木材や薪炭の利用はもとより、キノコや山菜、野生鳥獣といった森のめぐみとともに暮らしてきた。また、森のめぐみを活かす過程で、人々は、様々な技術や文化、道具、ルールをも育んできた。このように、人が自然<sup>1</sup>と関わる過程で生まれる文化の多様性を、本書では「生物文化多様性」(Biocultural Diversity)<sup>2</sup>と呼ぶ。

日本は生物文化多様性の宝庫である。例えば、キノコや山菜を採る際の慣習のルールや民具。ユネスコ(国連教育科学文化機関)の無形文化遺産にも登録された「和紙」の製造に用いられる楮の栽培や紙漉きの伝統技法。英語で、“japan”と呼ばれる漆器の製造技法や原料である漆の栽培。冬の農閑期に野生鳥獣を狩猟するマタギたちが発達させた独自の「言葉」やルール……これらはいずれも人と自然が相互に密接に関係して築かれた高度で多様な生物文化である。

一方、エネルギー革命や経済のグローバル化、産業構造の変化などによって、人と自然の関係は大きく変化している。昔話のように「山へ柴刈」(薪拾い)に行かなくても電気や都市ガスといったエネルギーが私たちの生活を支え、スーパーに行けば、キノコや肉、魚が手ごろなサイズに分けて売られている。自然を相手にする第一次産業(農林漁業)の従事者割合は1950年に48.5%だったが、2009年には4.1%まで低下している。“自然と共生”してきたは

1 本章では、「自然」と「森林」(または「森」)という言葉を変換的に用いる。

2 生物文化多様性に関する研究は、主に言語学や民族学の分野を中心になされてきた。生物文化多様性について、Maffi(2001)は、「世界の自然・文化システムが示すあらゆる類型」、Loh and Harmon(2005)は、「出自を問わない、世界における差異の総体」と非常に広く定義している。本書では、メッセージをより明確にするために、「人が自然と関わる過程で生まれる文化の多様性」と限定的に定義する。なお、ここで言う「文化」には、言語や知識、規範、信仰といった人間に属するものに限らず、文化的景観や里地山山のように、人の介入によって生まれた景観や生態系といった二次的自然も含めて考える。

ずの日本人であるが、鬼頭（1996）の言葉を借りれば、私たちは自然と「切り身」の関係となりつつあり、自然のことを「我が事」として考える機会が減りつつある。こうした状況は、歪<sup>いびつ</sup>な状況をも生じさせている。

例えば、近年、増えすぎたシカやイノシシによる年間 200 億円とも言われる農作物被害の抑制を目的とした防止柵の設置や個体数調整（有害鳥獣駆除）に年間約 100 億円もの補助金が用いられている。しかし、かつて貴重な森のタンパク源として珍重され、その後、「保護」すらされてきた野生生物が、今や補助金で「駆除」され、消費しきれないシカの 90% 以上が埋設処分されているという事実は倫理的にも議論の余地がある。野生生物を「森のめぐみ」としていただくために食肉処理施設を建設しても、その運営は赤字が続き、補助金頼みであることも多い。この問題は、人と自然の関係が崩れている象徴と言える。

また、森林そのものにも課題がある。戦後の木材不足を受けて 1950 年代後半に開始された林野庁の拡大造林計画によって天然林は徹底的になぎ倒され、人工林が急増した。しかし、1964 年の木材輸入完全自由化に伴い、日本の木材は価格競争力を失い、間伐されずに放置された森林が目立ち始めた。間伐されない人工林では、山地崩壊や土壌流出など様々な問題が危惧されている。

このように、社会経済の変容に伴い、人と自然の関係が変化したことで、私たちは様々な課題に直面している。これら複雑な課題を根本的に解決する魔法の杖を見出すことは難しいが、今、私たちに求められていることは、「森と関わる」ということではないだろうか。シカやイノシシ、木の実を「森のめぐみ」としていただく。身近にある里山や雑木林の管理に関わる。登山やエコツーリズムで関わる。紙漉きや染色といった伝統工芸を通じて関わる。森に癒されることで関わる。そのカタチは多様である。これまで意識していなかった森との関わりを再認識することはもちろん、知らなかった関わり方を発見すること、また、関わり方の変容を分析することで、次代の「生物文化」が生まれるだろう。

「人と自然の関わり」に対する関心は、国際的にも大きくなりつつある。2014 年には、ユネスコと国連生物多様性条約事務局が実施する共同計画の一環で、「生物多様性と文化多様性とのつながりに関するフィレンツェ宣言」

が、2016年には「生物文化多様性に関する石川宣言2016」が採択された。これにより、生物文化多様性に関する研究・実践が、国際連合大学（UNU）をはじめ様々な機関によって推進されつつある。その背景には、「生物多様性」や「文化多様性」といった概念が注目を集めつつある一方で、その2つの連関については、十分に顧みられてこなかったという反省がある<sup>3</sup>。かつて、自然保護の問題も「人間か自然か」と二項対立・ゼロサムの論じられることが多かったが、人が関わることで自然の状態が向上し、自然があるから人の生活も豊かになる、という両者の互惠関係こそが問題解決の鍵だと認識されるようになってきた。

ただし、この概念は本質的に新しいものではないことにも留意する必要がある。例えば、本書「森林環境」を発刊する森林文化協会は、1978年に設立されたが、その当初から「山と木と人の融合」が理念として掲げられている。1976年に森林文化学を提唱し、協会の設立にも多大な影響を与えた筒井（1983）は、次のように述べている。

古い昔から、人間は森林との関係において、常に密接な交流を続けてきた。その関係が現在では破られようとしているが、あらためてそれをふりかえり、現代の中に新しい融合関係を創り出さねばならない。これが「山と木と人の融合」を現代に求める最大の目的である。

30年以上前に書かれた筒井の問題意識を本書も共有している。しかし、その「意識」の由来や中身、ありうる解決法は、当時とは異なるものである。今回、森林文化ではなく、あえて「生物文化多様性」という萌芽的な概念を掲げるのは、「新しい酒は新しい革袋に盛れ」という人類古来の格言もさることながら、前述したような、国際的な動向に対して、30年以上前から「森林文化」を謳ってきた本研究会が発信すべきテーマだと考えるためである。その際、人と自然の連関をもたらすノード（交点）として「森のめぐみ」に着目して考えることで、読者にも身近な話とだけ思っただけなら幸いである。

<sup>3</sup> 生物多様性条約（1992年／国連）、文化多様性条約（2005年／ユネスコ）も参照のこと。Persic and Scott（2015）は、「生物多様性と文化多様性を別々に取り扱う……二重のアプローチは、同じ場所で異なる利害関係が生じたり、異なる管轄省庁、異なる政策、法律によって異なる「多様性」の理解をもたらす……異なった二つの国際的な取り組みを創りだしてしまう」と指摘している。

本書を編集する森林環境研究会も2015年度から代替わりした。本書がこれからの森林文化を考える契機となることを祈念している。

〔参考文献〕

鬼頭秀一（1996）自然保護を問いなおす－環境倫理とネットワーク、筑摩書房。

Loh, J. and Harmon, D. (2005) A global index of biocultural diversity, *Ecological Indicators*, 5, 231-241.

Maffi, L. (2001) *On Biocultural Diversity: Linking Language, Knowledge, and the Environment*, Smithsonian Institution Press.

Persic, A. and Scott, J. (2015) UNESCO-SCBD Joint Programme on the Links between Biological and Cultural Diversity, in UNU-IAS OUIK (2015) *The Ishikawa-Kanazawa Biocultural Region: A model for linkages between biological diversity and cultural prosperity*. UNU-IAS OUIK, Kanazawa, Japan.

筒井迪夫（1983）森林文化論研究の基礎、*林業経済研究* 104, 72-74.

